

研究タイトル: 諸言語の音韻構造の解明

氏名:	桑本裕二 /Yuji KUWAMOTO	E-mail:	kuwamoto@akita-nct.jp
職名:	准教授	学位:	博士(文学)
所属学会・協会:	日本語学会・日本音声学会・日本音韻論学会・日本語学会・日本アフリカ学会		
キーワード:	言語学・音韻論		
技術相談 提供可能技術:	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語学</li> <li>・音韻論</li> <li>・</li> </ul>		



研究内容: 英語における頭子音結合の序列と聞こえ度階層の相関について

一般に、音節構造においては、聞こえ度の最も高い分節音である母音を音節の中核となし、音節の端に向かって徐々に聞こえ度が低くなる序列に従うべきという、聞こえ度配列一般化 (Sonority Sequencing Generalization; Selkirk 1984) が想定される。この一般化は多くの音韻論研究者によって支持され、また多くの言語において音節構造の基礎となるものであるが、例外も多い。英語においては、“space” /spers/, “stay” /steɪ/, “sky” /skaɪ/ などのように、摩擦音 /s/ に対してそれより聞こえ度の低い閉鎖音 /p, t, k/ が音節の中心に向かう方向への配列がなされ、聞こえ度配列一般化に対する代表的な反例となっている。本発表は、英語の頭子音結合の序列について、聞こえ度階層との相関について再解釈するものである。

英語の頭子音結合は、2子音結合の場合は、後部要素が半母音 /j, w/、流音 /r, l/ になっているか、前部要素が /s/ であるかのどちらかである。3子音結合の場合は、第1要素が /s/ で第3要素が半母音 /j, w/、流音 /r, l/ になっている。4子音以上の結合はない。以上から大まかにまとめられることは、① 頭子音が結合をなす(単子音でない)場合は、最も母音に近い聞こえ度を有する半母音 /j, w/ もしくはその次に高い聞こえ度を有する流音の /r, l/ である場合が大多数を占める、② /s/ は音節構造において特異にふるまう、ということである。

筆者は、以上の分布に対して、通常用いられる調音様式に基づく聞こえ度階層を、有声性に特化してとらえ直し、頭子音結合の序列にあてはめることを提案する。有声性の有無のみで聞こえ度を考慮するならば、有声音が無声音より聞こえ度が高いことになり、音節先頭部では「無声音—有声音」の序列に従うことになる。上記①については、母音に隣接した頭子音結合の後部要素となる半母音、流音は有声音であり、また、母音と同じく、体系上対応する無声音がないことを意味しているが、この場合の前部要素は有声音でも無声音でも、子音結合の序列は有声性に基づく聞こえ度階層に反しないことを典型的に示している。一方、対応する無声音のある有声阻害音 /b, d, g, v, ð, z, ʒ/ などは /\*sb, \*sd, \*sv, \*sð/ のように「無声音—有声音」という音節先頭部における有声性の聞こえ度階層に従っていないながら子音結合の後部要素になれない。このような分布の偏りから、(有声の) 半母音、流音と有声阻害音とは、音節構造に関わる有声性を聞こえ度階層に関して区別すべきである。また、②において、通常の聞こえ度配列一般化に従わない /sp, st, sk/ などは、2つの連続した子音がどちらも無声音であることにより、有声性のみで特化した聞こえ度階層「無声音 < 有声音」に対し、子音結合 C<sub>1</sub>C<sub>2</sub> の聞こえ度の差が「C<sub>1</sub> ≤ C<sub>2</sub>」、つまり、聞こえ度階層の序列に反しないことになり、3子音結合 /spr, str, skr/ など、また、その他の2子音結合も含めて、有声性が同等であるか、音節の先頭から「無声音—有声音」の順になっているかのどちらかであり、有声性のみに基づく聞こえ度階層は調音様式に基づくものに比べて極めて厳格に保たれていることが示される。

Selkirk, Elizabeth (1984) On the major Features and syllable theory. In: Mark Aronoff & Richard T. Oehrle (eds.) *Language Sound Structure*, 107-136. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)	